

小ギクの高品質・安定出荷

要約

- ・盆需要に対応するため、県育成盆咲き品種、電照栽培及び高温対策技術の導入を推進。
- ・病害虫による被害を軽減するため、防除対策の指導を徹底。

現状(背景)と課題

- ・小ギク供給の責任産地として、お盆時期は高品質・安定出荷が必須。
- ・近年、異常気象により開花時期の年次変動が拡大。
- ・鱗翅目害虫や白さび病、黒斑病などの難防除病害虫が増加。



目標

- ・県育成盆咲き品種栽培面積
74a → 87a
- ・電照栽培適性品種数
5品種 → 6品種
- ・遮光資材等導入面積
15a → 20a
- ・共撰秀品率
81.4%以上

活動内容 (対象：JAならけん西和花卉部会)

- ・県育成品種の栽培技術指導を実施 (15回)
- ・盆咲き品種開花予測調査を実施 (15回)
- ・電照栽培技術指導・花芽調査 (18回)、電照栽培研修会 (3回) を開催
- ・遮光資材等による夏季高温対策現地試験圃を設置 (2カ所)
- ・鱗翅目害虫 (材ガガ、刈仔ゾリ) のフェロモントラップによる発生予察を実施 (各害虫 1カ所)
- ・病害虫防除現地指導 (27回)、品質向上対策講習会 (2回) を開催

成果

- ・県育成盆咲き小ギク 3 品種の栽培面積は 83a (R2:13a 作付増加)。
- ・産地における電照適性品種は赤、白、黄各 2 品種をラインナップ (R2:1 品種増加)。
- ・令和 2 年の盆出荷では、全ての階級、色で市場からの予約注文への対応を実現。
- ・天候の影響により遮光資材導入面積は 13a となったが、8 月下旬咲きの遮光有りの試験圃で、無しの圃場で収穫率 50% のところ、74% 収穫でき、高温による開花遅延の軽減効果を実証。
- ・R2 年の共撰秀品率は、過去 5 年平均の 81.4% を上回る 82.2% を達成。



遮光資材の現地試験圃



フェロモントラップを使った発生予察

北部農林振興事務所農林普及課
担当：農産物ブランド推進第 1 係 藤井
(リーディング品目支援事業)

普及活動のポイント

- 県育成小ギクについては、現地評価試験を実施し、生育状況及び開花期を調査。
- 盆電照栽培における花芽調査の結果は、電照研究会会員にLINEを用いてリアルタイムで配信することで、効率的に生産者、関係機関と共有。
- 遮光資材 2 種類の現地試験圃を 2 カ所で設置したことで、夏季高温対策効果を生産者自らが体感。
- フェロモントラップを用い、チョウ目害虫の誘殺状況を調査した結果、想定（夏以降）よりも早い5月から飛来していることが判明し、産地全体での適期防除実施の機運を醸成。

対象の変化

- 電照栽培は試験導入当初（H26年頃）、15戸で1.4haの規模であったが、R2年には22戸で3.2haまで増加。次年度は設備増や、新規取り組み希望等の動きがでてきている。また、盆以降も安定して継続出荷できるよう、8月下旬以降出荷を狙った栽培でも電照栽培に取り組む動きがでてきた。
- 次年度、遮光資材による高温対策の現地試験の新規取組者数は、2戸。

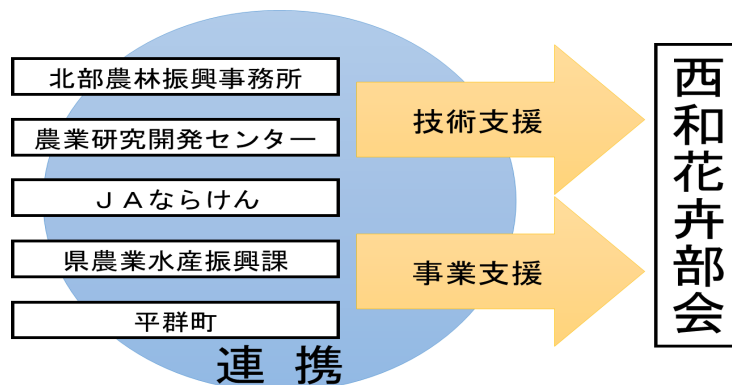
対象者からのコメント

- 市場からは小ギク供給の責任産地として、特に最需要期のお盆に高品質な小ギクを安定して出荷することが求められており、高温の影響を受けにくい県育成盆咲き品種の導入や、電照栽培の普及・定着、夏季の高温対策、病虫害防除の徹底が不可欠。今後も関係機関と連携して産地への技術支援を期待。

これからの活動ビジョン

- 県育成小ギクについては、年次変動確認を含め現地適応評価試験調査を継続。
- 電照栽培の花芽調査における開花予測については、研究機関と連携し、AIを用いた手法を模索。
- チョウ目害虫の防除対策として、薬剤だけでなく、ネットハウスの利用など耕種的防除を取り入れた対策を検討。

活動体制



用語解説

【電照栽培技術】

キクの開花が日の長さ
に左右される性質を利用し、人工的に照明をつけることで、開花時期を調節する技術。



【発生予察】

農作物等における病虫害の発生状況や気象の推移について調査を行い、病虫害の発生を予想し、その情報を生産者等に提供すること。